



# 名大トピックス

No.140 平成17年1月31日発行 名古屋大学総務企画部総務広報課 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Tel(052)789-2016  
http://www.nagoya-u.ac.jp

## 第12回名古屋大学科学研究オープンシンポジウムを開催



### CONTENTS

・第12回名古屋大学科学研究オープンシンポジウムを開催...	2	・エコトピア科学研究機構エネルギーシステム(中部電力)寄附研究部門が公開見学会を開催.....	18
<b>[全学ニュース]</b>		・農学国際教育協力研究センターが2004年度第7回オープンセミナーを開催.....	19
・豊田章一郎トヨタ自動車(株)取締役名誉会長が本学を視察...	3	・第12回博物館コンサートを開催.....	19
・平野総長が上海の大学等を訪問.....	4	・博物館がパーミヤン遺跡の仏教壁画について世界初の科学的な年代測定を実施.....	20
・全学技術センターが技術支援の説明会を開催.....	6	<b>[名大を表敬訪問された方々]</b> 平成16年10月~12月.....	21
・野依記念物質科学研究館・野依記念学術交流館が中部建築賞を受賞.....	7	<b>[研究ナウ]</b>	
・セクシュアル・ハラスメント防止研修会を実施.....	8	・アジア太平洋諸語の系譜 近藤 健二.....	22
・職員組合と労働協約等を締結.....	8	・超構造らせん高分子 八島 栄次.....	24
・AC21国際学術交流プロジェクトへの協力要請のため山本副総長がチュラロンコン大学とカセサート大学を訪問.....	9	<b>[名大生のスポーツ&amp;イベント]</b>	
<b>[部局ニュース]</b>		・名古屋大学体育会会長表彰式を挙行.....	26
・教育学部がインターンシップ成果報告会を開催.....	10	・舞踏研究会の中河・池中ペアがモダン部門の「クイック・ステップ」で優勝.....	27
・法学部フェスティバル2004が開催される.....	11	<b>[INFORMATION]</b>	
・法学部公開講座が始まる.....	12	・名大史をつむぐ資料を大学文書資料室に!.....	28
・シンポジウム「法曹倫理教育の理念と課題」が開催される...	13	<b>[イベントカレンダー]</b> .....	29
・第4回名大ERC・キタン会 名古屋ビジネスセミナーを開催...	13	<b>[本学関係の新聞記事掲載一覧]</b> 平成16年12月分.....	31
・工学研究科懇話会が開催される.....	14		
・大学院工学研究科が財団法人科学技術交流財団「学術部門賞」を受賞.....	15		
・本多光太郎没後50年記念講演会が開催される.....	15		
・大学院国際開発研究科が国内実地研修現地報告会を開催...	16		
・太陽地球環境研究所がパネルディスカッション「オーロラが教えること」を開催.....	17		



# 第12回名古屋大学科学研究オープンシンポジウムを開催

- 「今あらためて『環境』を考える」をテーマに講演と討議 -



あいさつする平野総長

第12回名古屋大学科学研究オープンシンポジウムが、12月17日(金)野依記念学术交流館において、本学の教職員や一般市民など、約180名の参加を得て開催されました。

このシンポジウムは、本学の多様な学術研究成果を学内外に広く公表し、意見及び情報の交換を図ることを目的として、平成5年度から開催されているもので、今年度は、愛・地球博の開催を目前に控え、「今あらためて『環境』を考える」をテーマに、環境科学各分野の第一線で活躍している研究者による講演・討論が行われました。

シンポジウムでは、松下裕秀組織委員会委員長長の趣旨

説明、平野総長のあいさつの後、4名の講師が各々の視点から研究成果を報告しました。

前半では、村田静昭環境学研究科教授が、「環境ホルモン問題の今」と題して、有機化学の立場から、化学物質がもたらした環境汚染への取り組み、環境破壊問題の反省について、また、辻本哲郎工学研究科教授が、「流域管理における河川景観の役割 - 治水と生態系保全」と題して、河川工学、河川生態学の立場から、治水と生態系保全を中心に講演を行いました。

後半では、廣瀬幸雄環境学研究科教授が、「環境計画への市民参加について - ドイツの事例から考える」と題して、環境社会心理学の立場から講演を行った後、伊勢田哲治情報科学研究科助教授が、「環境倫理学の視点から環境科学を考える」と題して、環境倫理学の思考法を紹介し、環境倫理学と環境科学の接点を探り、環境倫理学の視点が異分野との接着剤となることが可能であると講演しました。

続いて、戸田山和久情報科学研究科教授の司会進行のもとで行われたパネルディスカッションでは、講演した4名の講師がパネリストとなり、会場から出された多くの意見、質問等に対して、活発な討議を行い、参加者は熱心に耳を傾けていました。



講演する村田環境学研究科教授



熱心に聞く参加者



## 豊田章一郎トヨタ自動車(株)取締役名誉会長が本学を視察



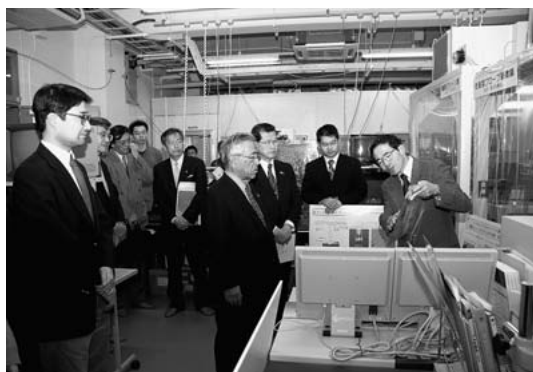
赤崎特別教授との懇談の様子

豊田章一郎トヨタ自動車(株)取締役名誉会長(工学部機械科卒業、名古屋大学全学同窓会会長、2005年日本国際博覧会協会会長)は、12月27日(月) 本学を視察されました。

豊田会長には、全学同窓会総会が開催される際には、本学にお越しいただいておりますが、多忙のため、これまで学内を視察される時間はありませんでした。その際に、豊田会長から少し時間を取って本学を見たいとの意向があったのを受けて、今回の視察が実現しました。

初めに、平野総長、理事等との懇談が総長応接室において行われ、平野総長から学内の動向等について説明がありました。その後、IB電子情報館へ移動し、北館3階の赤崎記念研究センターで、赤崎 勇特別教授との懇談及び同センターの視察をされた後、谷口総長補佐(施設整備担当)の案内で館内を視察されました。

次に、工学部2号館にある三矢保永工学研究科教授の



三矢研究室の視察の様子

研究室を訪れ、同教授から分子膜のナノダイナミクス特性を測定する装置、ナノ厚さの液体膜の機械力学的な特性を測定する装置等の説明を受けました。

続いて、工学部航空機械研究実験棟を訪れ、福田敏男工学研究科教授の研究室で、同教授から人体医療用血管モデル、モンキーロボット、ITS群ロボット、地雷探査ロボット等の説明を受けた後、石田幸男工学研究科教授の研究室で、同教授から自動車駆動系に関する振動実験装置、風力発電に関する振動実験装置等の説明を受けました。

その後、野依記念物質科学研究館へ移動し、7階にある野依研究室で野依良治特別教授(理化学研究所理事長)と懇談された後、2階のノーベル賞展示室を視察されました。

最後に訪問された博物館では、足立博物館長から高木家文書の絵図面、電子顕微鏡等の展示物や特別展等の催しの内容などについて説明を受け、今回の視察は終了しました。



野依特別教授との懇談の様子



博物館の視察の様子



## 平野総長が上海の大学等を訪問

平野総長は、12月12日(日)から15日(水)までの4日間、森理事、早川 AC21推進室長らとともに、学術国際交流協定の締結及び AC21に関する打ち合わせのため、中国・上海の大学等を訪問しました。

### ■ 上海名大会との懇談会

上海名大会との懇談会が、12月12日(日)、上海在住の元名大留学生等14名の参加を得て開催されました。

懇談会では、初めに、平野総長からあいさつがあり、愛知万博及び本学が開催する万博国際フォーラムと7つのサテライトフォーラムについて紹介がありました。また、来年度中に名大フェアを開催し、本学の研究等について上海で強くアピールしたいこと、本学同窓生のフォロー体制強化のためにも上海連絡事務所の設置を検討していること、本学に留学していた頃の不満・要望等があればこの機会に是非聞きたいこと等が述べられました。続いて、同窓生等の自己紹介があった後、活発に意見交換を行いました。



上海在住の同窓生との記念撮影

### ■ 同済大学訪問

12月13日(火)、同済大学を訪問し、Wan Gang 学長をはじめ、関係教員、国際交流担当者等との会談が行われました。

会談では、Wan 学長の歓迎のことばに続いて、平野総長から、愛知万博及び本学が開催する万博国際フォーラムについて説明がありました。また、愛知万博のテーマでもある「環境」について、共同研究の可能性を検討したいとの提案が両大学からあり、AC21を通じた研究交流促進の可能性についても議論が行われました。その後、両大学の概要紹介、AC21の概要・具体的な活動(ベンチマーキング、学生世界フォーラム)等の意見交換が行われました。



会談に際して握手をする平野総長と Wan 学長

### ■ 復旦大学訪問

12月13日(火)、復旦大学を訪問し、平野総長と復旦大学の Wang Shenghong 学長が学生交流に関する覚書に署名しました。

復旦大学からは、Wang 学長をはじめ、関係教員、国際交流担当者等6名が出席し、初めに、Wang 学長から歓迎のあいさつがあった後、平野総長から本学の概要紹介がありました。続いて、友好的な雰囲気の中で、両大学の学長が覚書に署名を行いました。これにより、1999年の同覚書が更新され、本学と復旦大学との交換学生について、引き続き授業料等は不徴収となりました。また、本学からは、万博国際フォーラム、AC21の概要、AC21学生世界フォーラム及び NUPACE について説明を行いました。



署名前に懇談する平野総長と Wang 学長

## ■ 上海交通大学訪問

12月13日(火)上海交通大学のXie Sheng-wu学長らとの会談が行われました。会談では、最初に、Xie学長から歓迎のあいさつがあり、平野総長からは、エコトピア科学研究機構及び万博国際フォーラムについての紹介がありました。次に、Xie学長から、研究者交流を強めたいとの提案が出され、新たな共同研究の可能性について検討を始めることとしました。続いて、本学から、愛知万博及び万博国際フォーラムへのXie学長の出席及びAC21学生世界フォーラム・AC21運営委員会への参加者派遣の依頼、NUPACEの紹介等が行われました。

また、12月15日(水)同大学を訪問し、葉取源常務副学長との会談が行われ、平野総長から、AC21シドニーフォーラムの概要及びAC21の具体的な活動についての紹介がありました。また、葉常務副学長からは、学生及び若手研究者の派遣を検討したいとの提案があり、これに対し、平野総長から積極的に受け入れたい旨の発言がありました。



会談後の記念撮影。  
前列左・Xie学長、前列右・平野総長

## ■ 中国科学院上海有機化学研究所訪問

12月14日(火)中国科学院上海有機化学研究所を訪問し、平野総長と中国科学院上海有機化学研究所のBiao Jiang所長が両機関の学术交流協定文書に署名し、同協定が締結されました。

同研究所からは、Biao所長をはじめ、関係研究者等7名が出席しました。初めに、Biao所長から、本協定の締結に至った経緯の説明とともに、歓迎のことばがあった後、平野総長から、この協定により、実質的な交流が深まり、ひいては社会に貢献することが出来るよう期待している旨の発言がありました。また、同研究所の概要の紹介に続いて、平野総長による本学の概要、万博フォーラム等の紹介があった後、友好的な雰囲気の中で、学术交流協定文書への署名が行われました。



学术交流協定締結後、握手をする平野総長とBiao所長



## 全学技術センターが技術支援の説明会を開催

全学技術センターは、12月16日(木) シンポジオンホールにおいて、「技術支援の説明会」を開催しました。

この説明会は、今般、全学の技術支援業務が開始されることに伴い、全学の教職員を対象に、同センターが実施する技術支援業務の内容、技術支援の依頼方法等について、知ってもらうことを目的として開催されたもので、当日は、100名を超える教員、技術職員及び事務職員が参加しました。

説明会では、山本センター長(理事)から、センターの目的は、公平で効果的な全学の技術支援を実施すること及び技術交流を盛んにし、技術レベルの向上、技術の継承を可能にすることであり、全学の技術支援ニーズに対応できるようセンターを運営していきたいとあいさつがありました。

次いで、竹谷センター技術部長から、センターの各技術系の業務内容及び業務依頼の仕方について、全学技術センターパンフレットに沿って詳細な説明がありました。説明では、依頼業務をスムーズに処理するため、依頼業務の受入可否及び受入先を迅速に判断、調整ができるよう全学技術センター実務委員会に、技術



(左) あいさつする山本全学技術センター長  
(右) 説明する竹谷全学技術センター技術部長

分野ごとの代表者による「依頼業務調整グループ」を組織した点が注目されました。また、「業務依頼申請書」については、技術職員が行う依頼業務の種類・量等、依頼業務に係るあらゆるデータの蓄積のために必要としており、業務を依頼する場合には、必ず申請書を同センター実務委員会に提出願いたいとの説明がありました。

続いて、依頼業務調整グループの自己紹介があった後、参加者から、業務依頼の期間・内容、負担金の徴収等について質問があり、活発な質疑応答が行われました。



熱心に説明を聞く参加者



## 野依記念物質科学研究館・野依記念学术交流館が 中部建築賞を受賞

野依記念物質科学研究館と野依記念学术交流館の2つの建物が、第36回中部建築賞（平成16年度）を受賞しました。

この賞は、中部建築賞協議会の主催で、中部圏内（愛知・岐阜・三重・静岡・福井・石川・富山・長野・滋賀の9県）で地域社会の発展に寄与し、かつ「持続可能な社会」を目指すという時代の要請に対応し、地域と環境に根ざした優れた作品に対して、その功績を讃えて表彰されるもので、今年で36回目となります。

表彰式は、12月14日（火）名古屋市内のホテルで行われ、一般部門に応募した71作品の中から入賞した4施設の建築主、設計者、施工者がそれぞれ表彰されました。

野依記念物質科学研究館と野依記念学术交流館は、



銘板

野依良治特別教授（理化学研究所理事長）のノーベル化学賞受賞を記念して建設されたもので、設計を名古屋大学施設部（現施設管理部）と㈱飯田善彦建築工房、物質科学研究館の施工を銭高・伊藤工特定建設工事共同企業体、学术交流館の施工を小原建設㈱が行いました（2つの建物の詳細は、キャンパスクローズアップ1、2（本誌No.132、133）をご覧ください。）

なお、本学では、第3回（昭和46年度）に医学部図書館及び学生食堂、第24回（平成4年度）にシンポジオンが中部建築賞を受賞しています。



野依記念学术交流館（撮影 阿野太一）



野依記念物質科学研究館（撮影 阿野太一）



## セクシュアル・ハラスメント防止研修会を実施 - リスクマネジメントとしてのセク・ハラ防止対策 -

「職員のためのセクシュアル・ハラスメント防止研修会」が、11月17日(水)及び12月7日(火)の両日、一般職員を対象に、また、12月20日(月)には、管理監督者を対象に実施されました。

この研修会は、セクシュアル・ハラスメントの理解と早期発見・防止を目的として開催されたもので、3日間で約250名の参加がありました。

12月20日の研修では、株式会社イーブ代表取締役社長の西川あゆみ講師から、「リスクマネジメントとしてのセク・ハラ防止対策」と題し、

セクシュアル・ハラスメントの理解、組織のリスクマネジメント、防止対策について、ケーススタディ及び班別討論を交えた講演があり、参加者は管理職としての対処方法等の理解を深めました。

本学では、部局ごとに教員を対象とした研修会を実施しているほか、学生を対象とした多くの研修も実施し、セク・ハラ防止活動に力を注いでいますが、今後も、研修会でのアンケート結果を活用するなどして、セク・ハラ防止対策に取り組んで行くことにしています。

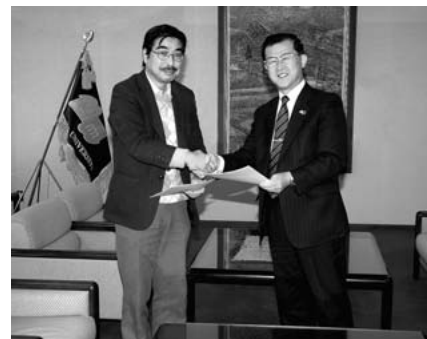


事例研究の検討結果を発表する参加者



## 職員組合と 労働協約等を締結

本学は、12月28日(火) 平野総長と神山名古屋大学職員組合執行委員長が、「団体交渉に関する労働協約」、「組合事務所等の貸与に関する労働協約」、「部局交渉に関する覚書」及び「組合事務所等の貸与に関する覚書」に署名し、労働協約等を締結しました。



労働協約等を締結後、握手を交わす平野総長と神山執行委員長





## AC21国際学術交流プロジェクトへの協力要請のため 山本副総長がチュラロンコン大学とカセサート大学を訪問



チュラロンコン大学にて 左から3人目がスーティボム副学長

山本副総長は、11月23日(火)から26日(金)の4日間、早川 AC21推進室長らとともに、AC21の連携協力を強化するため、乾季に入ったタイ王国にあるチュラロンコン大学とカセサート大学を訪問しました。

24日に訪問したチュラロンコン大学では、スーティボム副学長兼大学院副院長及び国際協力室員2名と、昨年7月の国際フォーラム総会(本学、シドニー大学の共催)で議決された「AC21規程」及び今年開催される「学生世界フォーラム2005」を中心に話し合いが行われました。スーティボム副学長は、AC21規程の変更やプロジェクト企画に関して事前に検討されていたため、本学側からの説明も快く承諾していただきました。

25日には、ドンムアン空港近郊にあるカセサート大学を訪問し、インピトゥクサ学長をはじめ、副学長、学部長、国際交流担当者など計19名の関係者と、昼食をはさみ3時間にわたり、これから開始する「ベンチマーキング活動」、「学生世界フォーラム2005」及び「万博国際フォーラム」を中心に話し合いが行われました。話し合いに出席したカセサート大学執行部メン

バーの数からもわかるように、カセサート大学は、本学との国際交流関係を重視しており、AC21のプロジェクトに対しても積極的な取組みの姿勢が示されました。また、2年後に、タイの国立大学も「法人化」を迎えることもあり、ベンチマーキングに関しては矢継ぎ早に質問が投げかけられました。

また、両大学訪問の合間をぬって、科学技術開発庁(NTSDA)政策アドバイザーの渡辺泰司氏及び日本学術振興会バンコク研究連絡センター長の吉田敏臣氏とも話し合いをもち、タイにおける本学の国際交流協力活動のあり方に関してアドバイスをいただきました。



カセサート大学にて 前列右から2人目がインピトゥクサ学長



## 教育学部がインターンシップ成果報告会を開催

教育学部は、11月25日(木)、教育学部大会議室において、インターンシップ成果報告会を開催しました。

教育学部のインターンシップは、大学生の職業意識を高めることを目的として、平成10年度から始まったもので、平成14年度からは正規の授業として単位化されています。また、成果報告会は、その最終回の授業兼試験として位置付けられています。

今年度は、「キャリア教育実習 インターンシップ」を受講した教育学部の学生に加え、インターンシップの事前準備講座として開講されている「技術教育学講義」を受講した工学部、情報文化学部などの他学部の学生、総勢14名が成果報告会に参加しました。

初めに、教育学部インターンシップ委員会委員の寺田盛紀教育発達科学研究科教授から、同学部のインターンシップの位置付けとその後の進展について話があった後、インターンシップ委員長の中宣秀教育発達科学研究科教授から、全体説明が行われました。

成果報告会は、パワーポイントを使い、実習内容、インターンシップで学んだこと、今回の反省点、後輩に伝えることなど、写真や図表を取り入れながら各自の体験を説明するという、ビジュアル・プレゼンテーション方式で行われました。参加した学生から、技術教育学講義の授業を通して学んだIT手法を駆使した報告が行われ、20名に及ぶ企業や官庁の参加者

から熱心に仕事に取り組んでいたとの講評がありました。また、どの学生からも、実際の仕事は厳しく大学生活との相違が大きいことを痛感した、仕事上の責任の重さ、時間の大切さを痛感した、自主性や積極性が大切であることを感じた、イメージだけであった行政の仕事が体験により体に染みついた、先輩に是非インターンシップ体験を薦めたい、といった報告があり、インターンシップの成果としての「気づき」が特徴的でした。

最後に、インターンシップの事前指導をしていただいた山田徳男講師(ティー・ワイ・ビジネス代表)から、学生の発表に対する講評が行われるとともに、多数の学生を快く受け入れていただいた企業など受入先各位に謝意が述べられました。



インターンシップ成果報告会の様子



## 法学部フェスティバル2004が開催される

法学部フェスティバルは、法学部創立50周年を契機に、平成12年12月から開催されるようになった恒例の行事で、今年も12月1日(水)から11日(土)までの間で、学部学生のほか、大学院学生や留学生、教員も含め多数の参加を得て、多彩な企画が実施されました。

12月1日(水)

### ・インターンシップ全体報告会

法学部ではインターンシップ(就業体験)を正式授業科目として位置付け、今年も2、3年生を中心に100名以上の学生が企業や官公庁等で実習を行いました。その締めくくりとして、全体報告会が受入機関の方も招待し開催されました。



インターンシップ全体報告会の模様

12月4日(土)

### ・スポーツ大会

(バスケットボール・バレーボール・卓球ダブルス)

バスケットボールは5チーム、バレーボールは法科大学院の2チームを含む8チーム、卓球ダブルスは留学生チームを含む6ペアが参加し、熱戦が繰り広げられました。



スポーツ大会(バレーボールでの熱戦)

### ・第16回プレゼンテーションコンテスト

法学部創立40周年を記念して、昭和63年から開始された伝統ある行事で、今回は「個人の自由と自己責任」をテーマに行われ、学部ゼミチームを中心に4組の参加がありました。各組15分間の熱演の結果、浜田ゼミチームが前回に引き続き優勝しました。終了後には、表彰式及び懇親会が、生協南部食堂において、約100名の参加を得て行われました。

12月8日(水)

### ・法学部講演会：講師 丹羽宇一郎氏(伊藤忠商事(株)取締役会長、法学部OB)

法学部OBである丹羽宇一郎氏が、「経済界としての法学部学生への期待」と題して講演をされ、法学部生を中心に、他学部の学生も含め約180名の参加がありました。丹羽会長は、主要国の法曹養成制度との比較の中で、わが国の法学部・法科大学院のあり方についての意見を述べられると共に、学生に対し、「『常識・良識』に裏付けられたリーガルマインドの醸成とその研鑽に努めてもらいたい。」と激励されました。



丹羽宇一郎氏による講演

### ・インターナショナルフェア

留学生が作る郷土料理を楽しみながら、交流を図るパーティで、留学生交流サークルであるSOLVが企画したものです。10か国の留学生が自慢の郷土料理に腕をふるいました。



インターナショナルフェア、自慢の郷土料理を前に

12月6日(月)~10日(金)昼休み時間

### ・ゼミ紹介企画

今回からの新しい企画で、各々のゼミが開講されている曜日の昼休みに、各ゼミ5分で、代表者がゼミで行われていることやゼミの雰囲気等についてプレゼンテーションを行うというものです。

12月11日(土)

### ・法学部公開講座記念講演：講師 鳥越俊太郎氏(ニュースキャスター)

ニュースキャスターの鳥越俊太郎氏による「市民のための法曹とは」と題する講演が行われ、学部学生・市民ら約120名の参加がありました。鳥越氏は、講演で、桶川女子大生殺人事件に関わった経験から、弁護士等の役割を強調しました。



## 法学部公開講座が始まる

- 附属学校での中高生向け出前講義（学びの杜）も開催 -



講演する鳥越俊太郎氏

法科大学院設立を記念した「法学部公開講座」が、12月11日(土)の記念講演を皮切りに始まりました。

この公開講座は、法学部・大学院法学研究科が行っている「市民向け法律教育プロジェクト」(総長裁量経費)の一環として開催されたものです。また、同プロジェクトの一環として、附属学校での中高生向け出前講義(学びの杜)も行われました。

記念講演では、ニュースキャスターの鳥越俊太郎氏による「市民のための法曹とは」と題する講演が行われ、学部学生・市民ら約120名の参加がありました。鳥越氏は、講演で、桶川女子大生殺人事件に関わった経験から、弁護士等の役割の重要性を指摘しました。

その後、以下の日程で連続公開講座が開催されます。

### [ヨーロッパ文化・社会への誘い]

- 12月21日(火) ナポレオンの栄光としての法典 - 六法の源流をたずねて  
石井三記法学研究科教授 [専門:西洋法制史]
- 1月13日(木) スウェーデンの社会と社会保障 - 高福祉国の実像に迫る  
中野妙子法学研究科助教授 [専門:社会保障法]
- 1月28日(金) 廃墟から蘇えるドイツ - 戦後の「くに」づくりと新憲法  
北住炯一法学研究科教授 [専門:西洋政治史]

### [現代社会を見るクリオの眼]

- 1月18日(火) 日本の地方自治制度の歴史と市町村合併  
山田公平名古屋大学名誉教授 [専門:日本政治史]
- 2月4日(金) 安全・安心と憲法  
森 英樹副総長・法学研究科教授 [専門:憲法]

### [国際社会の課題]

- 1月20日(木) グローバル化時代の国際経済法学 - WTOの光と影  
佐分晴夫法学研究科長・教授 [専門:国際経済法]

### [現代の企業法務]

- 2月7日(月) 知的財産法の最前線  
鈴木将文法学研究科教授 [専門:知的財産法]
- 2月10日(木) 「会社法制の現代化」の動向  
浜田道代法学研究科教授 [専門:商法]

また、教育学部附属学校での中高生向け出前講義(学びの杜)が、以下の日程で開催され、中高生や保護者ら40名を超える参加がありました。

- 第1回 12月14日(火) 説得の学問としての法律学  
中東正文法学研究科助教授 [専門:商法]
- 第2回 12月15日(水) プロ野球選手のストライキ - プロ野球選手は労働者か  
和田 肇法学研究科教授 [専門:労働法]
- 第3回 12月16日(木) 賢い消費者 - カードの便利さと怖さ  
藤田 哲法学研究科教授・弁護士
- 第4回 12月17日(金) 安全保障と沖縄  
愛敬浩二法学研究科助教授 [専門:憲法]



出前講義(第1回)の様子



## シンポジウム 「法曹倫理教育の理念と課題」が 開催される

大学院法学研究科は、12月1日(水) 野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、愛知法曹倫理研究会、日弁連法務研究財団と共催で、シンポジウム「法曹倫理教育の理念と課題」を開催しました。

このシンポジウムは、名古屋弁護士会と愛知県内の法科大学院の後援のもと、法科大学院での法曹倫理教育のあり方とその実現方法について、地域の弁護士及び研究者の有志による2年余りの共同研究の成果を広く共有しようとしたもので、100名近くの参加がありました。

シンポジウムは、弁護士の松本篤周氏の司会進行のもと、佐分法学研究科長と日弁連法務研究財団理事長の新堂幸司氏の主催者あいさつ、名古屋弁護士会法科大学院委員長の那須国宏弁護士の来賓あいさつに始まり、森際康友法学研究科教授が、「法曹倫理教育における実務家と研究者の協働」と題する基調講演、愛知大学法科大学院教授の森山文昭弁護士及び法学研究科教授の蜂須賀太郎弁護士が、それぞれの授業実践の映像記録を用いて法曹倫理教授法の技術と課題について個別報告を行いました。続いて行われたパネルディスカッションでは、参加者の間で、法科大学院での倫理教育がこれまでの職業倫理研修をどのように超え得るかなど、熱心かつ率直な議論が展開されました。



シンポジウムの様子



## 第4回名大ERC・キタン会 名古屋ビジネスセミナーを開催 - 日本経済と東海地域の展望 -

大学院経済学研究科附属国際経済動態研究センター(ERC)と社団法人キタン会(名古屋大学経済学部同窓会)は、11月16日(火)シンポジオンホールにおいて、第4回名大ERC・キタン会名古屋ビジネスセミナーを開催しました。

同セミナーは、地域に開かれた研究活動を推進するために開催されているもので、これまでも地域社会を担う公共団体、経済団体、報道機関等の協力を得てきましたが、今回からいくつかの団体に正式の後援をお願いしました。

セミナーでは、冒頭で、後援団体及び協力団体の紹介があった後、平川同センター長から、地下鉄名城線の全線開通により本学への交通の便が良くなったことや、本学が国立大学法人となったことを踏まえ、これまで以上にセミナーを発展させていきたいので、協力をお願いしたい旨のあいさつがありました。続いて、水谷研治中京大学大学院教授が、「日本経済と東海地域の展望」をテーマに講演を行い、「日本経済は財政赤字と米国の貿易赤字に支えられてきました。この2つの要因は持続不可能なので、破局に至る前に大きな犠牲を払ってでも対応する必要があります。東海地域が好調な理由は、バブルに乗らず、政府に頼らず、地道に努力して良い物を作り、投資してきたことです。万博と新空港は、この地域に長期的に大きな利益をもたらすでしょう。」と述べました。最後に、米国の貿易赤字、日本経済が借金体質になった契機及び要因、東海地域が好調な理由等について、活発な質疑応答が行われました。



講演する水谷氏



## 工学研究科懇話会が開催される

- 企業人と活発な意見が交わされる -

工学研究科懇話会が、12月9日(木)、工学研究科4号館大会議室において開催されました。

同懇話会は、大学院における流動型大学院制度、高度総合工学創造実験、インターンシップの導入等、多様な展開に対応できる21世紀型の高度人材を育成するために、様々な取り組みを行ってきた同研究科が、産学連携による人材育成の新たな展開について、産業界から意見、提言等をいただき、議論を深めることを目的として開催されたもので、同研究科からは、専攻長、副専攻長、常置委員会委員長等の教員及び事務職員が出席しました。

懇話会は、3部構成で行われ、最初に、澤木工学研究科長による「名古屋大学工学研究科の取組・展開について」と題する講演が行われ、同研究科及び関連研究センターにおける最近の組織改編、産学連携の視点から、これまでの人材育成の取組と現状及び将来への展望について説明がありました。続いて、「工学研究科における産学連携を体験して」と題して、産学連携による共同研究を遂行しつつ、同研究科博士課

程後期課程を修了し、学位を取得した企業人の立場から、手島勝弥氏(大日本印刷株式会社)及び彦坂幸信氏(富士通株式会社)が、人材育成と産学連携に関する課題及び提言を行いました。

その後、「企業からみた大学院教育における産学連携」と題して、懇話会委員の井上俊英氏(東レ株式会社理事 化成品研究所長) 上島良之氏(新日本製鐵株式会社名古屋技術研究部長) 柘植綾夫氏(三菱重工業株式会社常務取締役 技術本部長) 服部哲夫氏(トヨタ自動車株式会社専務取締役)及び山下勝比拓氏(株式会社東芝技術企画室理事 産学連携グループ長)による講演があり、現在の大学院教育における問題点、これからの産学連携のあり方、共同研究を通じた大学院学生の育成・研究指導及び高度人材育成への産業界の関わり方等について、貴重な意見及び提言をいただきました。

講演後の意見交換では、講演者と参加者との活発な質疑応答が予定時間を超えて行われるなど、講演者及び参加者にとって、非常に有意義な会となりました。



講演する澤木工学研究科長



講演者：左から上島良之氏、柘植綾夫氏、服部哲夫氏



講演者の話に耳を傾ける参加者



大学院工学研究科

## 財団法人科学技術交流財団 「学術部門賞」を受賞

大学院工学研究科は、11月29日(月)、財団法人科学技術交流財団が設立10周年を記念して開催した産学連携推進シンポジウムにおいて、学術部門賞を受賞することになり、澤木工学研究科長に賞状及び盾が授与されました。

学術部門賞は、地域の科学技術振興の一翼を担う団体として『交流』をキーワードに産学連携事業を推進してきた同財団が、学術の分野において、同財団の事業運営に顕著な貢献が認められたものに対して与えられるもので、同研究科の長年にわたる産学連携への取り組みが評価されたものです。

同研究科では、今後も積極的に大学の活動を社会に公開し、産と学との新たな連携をも視野に入れながら、産学連携への取り組みを行っていくことにしています。



「学術部門賞」の賞状及び盾



## 本多光太郎没後50年記念講演会 が開催される

本多光太郎没後50年記念講演会が、12月1日(水)、IB電子情報館において開催されました。

本多は1870年に愛知県矢作町(現在の岡崎市)に生まれ、1897年に東京帝国大学を卒業後、同大学講師、ドイツ留学を経て、1911年に創立された東北帝国大学の教授に就任し、当時最強の保磁力を誇ったKS磁石鋼を発明しています。金属材料研究所の所長などを経て、1931年からは東北帝国大学総長を3期9年務め、1937年には第1回の文化勲章を受章する一方で、日本金属学会を設立し初代会長に就任しています。

また、本多は名古屋帝国大学の創設委員の一人として尽力し、1939年に創設された名古屋帝国大学工学部には東北大学金属材料研究所から俊英な助教授4名が赴任するなど、創設期の名古屋大学は本多に多くの支援を受けています。

講演会は、本多記念会理事長の増子昇東京大学名誉教授のあいさつに始まり、ビデオ「つとめてやむな」及び「本多先生の講演」が上映されました。続いて、勝木滙元信州大学教授による「金属学への磁気分析法の導入(本多の着想)と本多の磁気理論、および本多スクール初期の多様な業績」、日本金属学会元会長の小岩昌宏京都大学名誉教授による「本多光太郎とKS鋼、新KS鋼の開発事情」と題する講演が行なわれ、約150名の参加者は熱心に聞き入っていました。なお、講演の内容は、最近公開された平林真編・本多記念会監修「本多光太郎 マテリアルサイエンスの先駆者 (アグネ技術センター)」に大方は所収されています。



記念講演会の様子



大学院国際開発研究科

## 国内実地研修現地報告会を開催

- 東白川村で学生が村の現状と将来の発展に向けた提言を披露 -

大学院国際開発研究科は、12月8日(水) 岐阜県加茂郡東白川村において、国内実地研修現地報告会を開催しました。

大学院国際開発研究科では、平成7年以来、正規のカリキュラムとして、日本の地域開発をめぐる課題と対策について現地調査を通じて学ぶことを目的に、国内実地研修を実施しています。今年度は、岐阜県加茂郡東白川村を調査対象地とし、11月10日(水)から12日(金)にかけて、東白川村役場をはじめ、同村の多くの団体や村民の方々の協力を得て、現地調査を実施しました。実地研修は、留学生15名を含む32名の学生が参加し、東白川村の教育、文化、経済開発、過疎化問題、農業婦人の役割などについて、インタビュー調査を中心に行われました。参加した留学生の多くは、開発途上国出身の学生でしたが、日本の農村が取り組む村おこしへの様々な試みに、大きな関心を寄せていました。

また、大学院の授業で国際開発について学んでいる日本人学生にとっても、日本の農村の開発への取り組みは、生きた学びの機会を提供してくれました。

国内実地研修の結果報告会は、例年、同研究科内で実施してきましたが、今年度は初めて調査地の東白川村役場において実施しました。報告会には、安江啓次村長をはじめ、村役場の関係者、

各種団体や組織の構成員、農家の方々に出席いただき、学生たちは村の現状と将来の発展に向けた提言を披露しました。短期の現地調査で学生が考察したことには限界があるとはいえ、学生の新鮮な視点は東白川村の関係者に興味をもって受け止められ、グループごとの報告の後、活発な質疑応答が行われました。また、報告会での意見交換から得られた新たな示唆を基に、学生は最終レポートを執筆し、その結果は『国内実地研修報告書』にまとめられ、東白川村の関係者をはじめ、高等研究機関や研究所に配布されることになっています。

なお、過去に実施された国内実地研修については、<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/project/fieldwork/Dfw/index-j.htm> をご覧ください。



発表を行う大学院学生





太陽地球環境研究所

## パネルディスカッション「オーロラが教えること」を開催

太陽地球環境研究所は、12月17日(金)札幌コンベンションセンターにおいて、財団法人札幌国際プラザ、北海道新聞社、NHK札幌放送局と共催で、パネルディスカッション「オーロラが教えること」を開催しました。

このパネルディスカッションは、オーロラの魅力を語り合うことはもちろんですが、「オーロラが太陽と地球の微妙なバランスの上に生ずること」、「オーロラがこの星にあることは、地球に生命がある証しであること」の意味を考えることを目的に開催されたもので、当日は、400名以上の参加があり、オーロラに対する関心の高さを伺わせました。

パネルディスカッションでは、前川公美夫北海道新聞社文化部長がコーディネーターを務め、渡邊鉄哉自然科学研究機構・国立天文台教授、津田浩之陸別天体観測所所長、オーロラ愛好家の渋谷純子朝日カルチャーセンター美術科長、上出太陽地球環境研究所所長の4名のパネリストがそれぞれの経験を通じたユニークな意見を述べました。

初めに、「オーロラとの出会い」をテーマに、コーディネーターの前川氏から、オーロラと出会った時どのように感じたかについて発議があり、パネリストから映像を使い個々の経験に基づく発言がありました。続いて、「その後オーロラをもっと知り、何がどのように変わったか」をテーマに、最初の感動からオーロラの持つ多様性について、自分の考え方がどのように変化したか意見が交わされた後、「オーロラからのメッセージ」をテーマに、オーロラから学ぶこと、オーロラの持つ神秘的な魅力から太陽と地球の関係、地



オーロラ博士のなんでも相談コーナー

球環境の大切さについて討論が行われ、パネリストから人類への提言が述べられました。参加者からは、「オーロラの動きは何を意味するのか」、「太陽に原因があるのに、なぜオーロラは夜側で強いのか」、「オーロラの発生は予報できるのか」など、活発な質問やコメントが寄せられました。なお、アーティスト・カラーセラピストの相川七瀬氏は、パネリストとして参加予定でしたが、天候不順による飛行機の欠航で出席できなくなったため、相川氏の各々のテーマに対するコメントが紹介されました。

また、パネルディスカッションの合間には、写真家中垣哲也氏によるスライドショーと作曲家で二胡演奏者の華心氏によるミニ演奏が行われ、参加者は、写真と音楽でオーロラを体感することができました。



パネルディスカッションの様子



熱心に聞く参加者



エコトピア科学研究機構

## エネルギーシステム(中部電力)寄附研究部門が 公開見学会を開催

### - エレクトロニクス最先端工場における高信頼度電源システム -

エコトピア科学研究機構エネルギーシステム(中部電力)寄附研究部門は、12月1日(水)、三重県亀山市にあるシャープ株式会社亀山事業所の協力を得て、公開見学会「エレクトロニクス最先端工場における高信頼度電源システム エネルギー供給の高信頼性への対応」を開催しました。

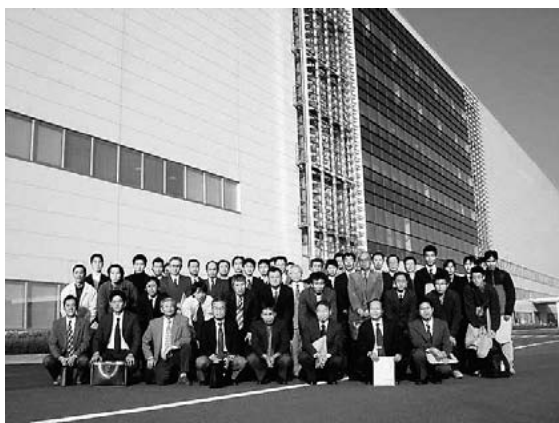
この見学会は、同部門の研究テーマである将来の最適エネルギーシステムの構築を目指した研究開発の最新動向を広く社会に知ってもらうために、毎年数回開催されているもので、一般市民も参加できます。

亀山事業所は、世界最先端の液晶パネル生産工場であり、24時間フル稼働しているため、一瞬の停電によっても数億円の損害が出るとされています。そのため、事業所で使用される全電力の1/3をガスタービンなどの自家発電システムで供給し、少なくとも常時稼働する必要がある部分は電力供給が途絶えることがないように受電システムが構成されています。また、落雷などによる一瞬の電圧低下(瞬低)に対する対策として、中部電力株式会社のフィールドテストを兼ねて、

平成15年7月より出力5000kW、出力時間1秒の超電導技術を利用したエネルギー貯蔵システム(超電導電力貯蔵システム:SMES)が導入されています。平成16年9月末には3時間で17回の瞬低が発生したものの、SMESにより亀山事業所の電力供給には全く問題なく、同じ三重県内の多気事業所では生産ラインが停止することがあったのに対し、亀山事業所では液晶パネル製造ラインが停止することはなかったということです。さらに、平成17年5月には、10MWのSMESが導入される予定になっているそうです。

見学会では、概要説明の後、瞬低対策の実例として、SMES本体を見学するとともに、最先端の製造工程である液晶テレビの生産工程も見学することができ、46名の参加者には大変好評でした。

エネルギーシステム寄附研究部門では、今後も見学会やシンポジウムなどを企画し、随時、エコトピア科学研究機構のホームページ(<http://www.esi.nagoya-u.ac.jp/>)に案内を掲載することにしています。



事業所前での参加者との記念撮影。背後の工場壁面には太陽電池パネルがあり、事業所の電力供給の一部を担っています(年間33,000kWh)。



超電導電力貯蔵システム(SMES)



## 農学国際教育協力研究センターが 2004年度第7回オープンセミナーを開催

農学国際教育協力研究センターは、11月25日(木)「マレーシア国水田灌漑プロジェクト(世界銀行)のシニア海外ボランティア(JICA)体験」をテーマに、2004年度第7回オープンセミナーを開催しました。

講師は、2002～2003年度の2年間、マレーシア国農業省の要請に基づき、世界銀行が実施した水田灌漑プロジェクトで、国際協力機構(JICA)のシニア海外ボランティアとして、水田灌漑技術の指導をしてきた山田雅弘氏(山田水利環境研究所(YWEI)代表取締役)で、同プロジェクトの概要と、JICAシニア海外ボランティアとしての活動体験を通じての感想などについて講演しました。

セミナーで、山田氏は、今回のマレーシア・ケランタン州コタバルでのプロジェクトで実施してきた、技術士としての長年の活動体験に裏打ちされた具体的な活動目標の設定(6トン/haの稲作収量と23万円/戸の収益の確保)、パソコンソフトを活用した自家製アメダス・データの作成とその応用など、創意工夫された技術指導活動を紹介しました。また、山田氏の活動報告から、現地マレーシアの研究者や農民に信頼されていることがよくわかり、「国際協力活動が実に楽しいものである」ことを実感させてくれることとなりました。セミナーには、インドネシアからの留学生や複数の海外技術協力経験者を含む11名が参加し、水田灌漑施設を設けた後の水利料の取り扱い方や、農民参加型とは異なる同プロジェクトの性格などについて、熱心な質疑が行なわれました。



オープンセミナーの様子



## 第12回博物館コンサートを開催 - レクチャー・リサイタル「英語の歌 - 千年の歴史」 -

博物館は、12月20日(月)、第12回名古屋大学博物館コンサート(NUMCo)として、イギリスの音楽学者(musicologist)のポール・ブラッケン(Dr. Paul Bracken)さんによる初めてのレクチャー・リサイタルを開催しました。

今回のレクチャー・リサイタルは、「英語の歌 - 千年の歴史」と題して、英語の歌の歴史について昔の楽譜の写真を見せながら、音楽史的な解説を行った後、ハーブ、マンドラ(マンドリンの原型)、キーボードを使って、イギリスの古い歌を時代順に8曲ほど歌うというものでした。なお、解説は、英語で行われましたが、通訳が付きました。

リサイタルは、ポールさんが博士論文の作成過程で明らかにした11世紀中頃のイギリス最古の歌(アングロサクソンの叙事詩)から始まり、ロビンフッドの物語詩やルネッサンス期の歌などが、時代を追って歌われました。初期の歌は歴史言語(古英語や中世フランス語)で歌われ、100名を超える聴衆はイギリスの歌だけでなく、歴史や言語も同時に体験することができました。

演奏後には、今回のリサイタルやイギリスの音楽の歴史に関する質問時間が設けられ、活発な質疑応答が行われました。また、聴衆からは、「演奏者と直接話すことができてよかった」、「普通のコンサートと違って、音楽史的な解説があり、博物館コンサートらしかった」、「リサイタル後の質問時間がよかった」などの感想が多く聞かれました。



リサイタルの様子



## 博物館がバーミヤン遺跡の仏教壁画について 世界初の科学的な年代測定を実施



記者発表の様子

アフガニスタンの世界遺産・バーミヤン仏教壁画の14C年代測定結果に関する記者発表が、12月10日(金)博物館で行われました。なお、この記者発表は、東京文化財研究所での発表とほぼ同時併行で行われました。

名古屋大学博物館は、2001年にタリバンによって破壊されたバーミヤン遺跡の仏教壁画の年代研究を東京文化財研究所と共同で進めており、また、学内では2003年度に立ち上げた名古屋大学シルクロード調査会のメンバーを中心に、今年度の総長裁量経費(プロジェクト名:破壊されたバーミヤン遺跡の総合研究)を得て、年代測定総合研究センター、大学院文学研究科、大学院生命農学研究科と共同研究を実施しています。今回の年代測定は、壁画の下地の壁に含まれているムギワラについて、本学の加速器質量分析計を用いて行われたもので、バーミヤン遺跡についての世界初の14C年代測定として

大きな注目を集めました。

記者発表には、足立博物館長、宮治 昭文学研究科教授、中村俊夫年代測定総合研究センター教授の3名が出席し、最初に、足立博物館長から、2003年に博物館で行われた第6回特別展「失われた文化財：アフガニスタン・バーミヤン展」が今回の年代測定研究のスタートになったことと年代研究の意義について説明がありました。続いて、宮治教授が壁画の美術史的年代論と放射性炭素年代の一致・不一致点に関する解説を行い、今後の研究展望についても触れた後、中村教授が14C年代を暦年代に換算する時の注意点などを図表を使って詳しく説明しました。記者からは、この年代測定結果の意義、今後の研究計画、バーミヤン遺跡保存事業に与えるインパクト、本学の行っている文化的共同研究などについて多くの質問がありました。

なお、今回のバーミヤン遺跡の14C年代測定結果については、2005年3月23日からスタートする第8回名古屋大学博物館特別展「時を測る - 地球誕生から中世まで」でも一般公開されます。



年代測定資料



## 名大を表敬訪問された方々

平成16年10月～12月

### 10.1 ドイツ ノルトライン・ヴェストフォーレン州 (NRW) 科学研究省次官等

Hartmut Krebs NRW 州科学研究省次官、Martina Munsel 同省国際交流担当官及び Nicole Zingsheim ドイツ連邦教育研究省国際局日本担当が来学され、同州内の2大学と本学の複数部局(工・物産センター)でそれぞれ進められている共同研究等の現状と今後の交流促進(学術交流協定締結等)について懇談を行いました。



### 10.21 モンゴル国立大学法学部長

Sodovsuren Narangerel モンゴル国立大学法学部長が来学され、本学との留学生交流を中心とした学術交流推進について懇談を行いました。

同氏は、法政国際教育協力研究センターの外国人研究員(客員教授)として滞在中に訪問されたものです。



### 11.4 哈爾濱工業大学学長等

王樹国哈爾濱工業大学学長、陳瑞同大教授、丁雪梅同大教授、呂曉偉同大副教授及び王明秀同大副教授が来学され、本学との学術交流の推進について懇談を行いました。

その後、先方からの質問事項(本学の法人化後等の実状に関する質問)について、関係理事・総長補佐及び事務職員との間で意見交換が行われました。



### 11.8 ハンガリー最高裁判所長官等

Zoltan Lomnici ハンガリー最高裁判所長官兼国家裁判官評議会会長、Gabor Nagy 同裁判所国際局長兼ヨーロッパ法務室長及び Ivett Csaszar 同裁判所国際局職員が来学され、本学法学研究科が取り組んでいる東欧諸国との「法整備支援事業」の実状等について懇談を行いました。



### 11.26 駐日ノルウェー王国大使

Åge B. Grutle 駐日ノルウェー王国大使他1名(同大使館員)が来学され、愛知万国博覧会期間中の「ノルウェーの日」に合わせて開催予定の日本・ノルウェー男女共同参画共同セミナーに対する協力要請等を主に、本学の取り組み状況等についても懇談を行いました。



### 11.29 中国科学技術大学学長等

朱 清時中国科学技術大学学長、楊 杰同大学教授及び李 全新同大学教授が来学され、本学との学術交流推進について意見交換を行いました。



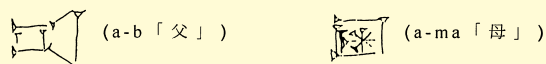


## アジア太平洋諸語の系譜

近藤 健二

現代の天文学は百億光年を超える宇宙の彼方の光をとらえることができると言いますが、これに比べると、歴史言語学というのはつまらないほど卑近な現象を扱う学問領域です。言語の遠い過去を探ろうにも、頼るべき資料が存在しないからです。世界最古の文明を誇ったシュメールの楔形文字にしても、それは、今から5千5百年くらい前にしか溯りません。しかし、言語にはそれよりもはるかに古く、長い、模糊とした歴史が秘められています。

シュメールの楔形文字



言語の歴史、正確に言うならば、現存する人類言語の歴史は、アフリカに現生人類の祖先が現れた約15～16万年前にはじまりました。それは、たった一つの言語が、人類の移動とともに幾千もの言語に分断されていった歴史のはじまりでした。

人類学の教えるところによれば、アフリカを出立した人類は約6万年前に中近東に達し、約5万年前に東南アジアに、約4万年前までには地続きであったオーストラリア大陸に達していました。また、ちょうどその頃、現生人類はネアンデル人住むヨーロッパ大陸や、東アジア諸地域に進出しました。マンモスを追って極北のシベリア、さらには地続きのアメリカ大陸に進出した人々もありましたが、約2万年前に「最後の氷河期」に襲われ、マンモスと一緒にマンモスハンターたちが南下して来ました。彼らの中には、地続きであっ

たカラフトを経由して今の日本にやって来た者もありました。彼らこそ、縄文文化を築いた縄文人の先祖です。なお、現在の南北アメリカに住む原住民は、地球が温暖化しはじめた約1万4千年～1万1千年前に今のベーリング海峡（当時は地続き）を渡った先史モンゴロイドの末裔です。

現生人類と人類言語は、あらまし上記の経緯を経て世界中に拡まりました。このように発想したとき、一つの確信めいた考えが浮かびます。日本語であれ、朝鮮語であれ、この地球上に存在する言語はすべて、現生人類がアフリカで使っていた言語とつながっている、という考えです。これを否定することはできません。これを否定することは、ある人がアフリカに誕生した現生人類の子孫でないことを論証するのと同じくらいに難しいでしょう。問題は、したがって、この世に存在する諸言語が過去に同一であったことの跡形をいかにほどにとどめているかどうかです。そしてその跡形を、歴史言語学という装置を使ってとらえることができるかどうかということです。

おおかたの言語は、すさまじい言語変化によって起源の言語の記憶さえも失ってしまったことでしょう。しかし、中には何万年か昔の面影をとどめている言語がないともかぎりません。そのような着想にもとづいて諸言語を観察すると、今まで見えなかったものが見えてきます。これまで系統的に無縁であると思われていた多くの言語が、思いもかけず、親類であることが判明します。たとえば日本語と朝鮮語と中国語は互いに系統の異なる言語だと考えられていますが、それがとんでもない見当違いだということが分かります。これらの言語は明らかに同系です。このことを裏付ける根拠を以下に少しだけ示してみましよう。

中国語	朝鮮語	古代日本語
ku-ó「括る」	mu-k-da「括る」	ku-ru「繰る」 ku-ku-ru「括る」 ma-ku-ru「捲る」
shí「食う」	mə-k-da「食う」	ku-fu「食ふ」
fù「父」	a-bə-ji「父」	ti(-ti)「父」
fù-ch <sup>h</sup> i-n「父」	a-ppa「父」	to(-to)「父」 shi(-shi)「父」
mǔ「母」	a-mə-ni「母」	a-mo「母」
mu-ch <sup>h</sup> i-n「母」	ə-mma「母」	fa-fa「母」 ka-ka「母」

私見では、これら ~ の中国語と朝鮮語と日本語は同源、つまり起源が同じです。このような判断を支えるものは、過去に音の消失を含むさまざまな音変化が起こるとともに、それぞれの言語でそれぞれの接頭辞・接尾辞が生み出され、また消失したという認識、あるいは仮定です。

まず について言うと、ku-/k- が語根、mu-/ma- が接頭辞、-da/-ru が接尾辞です。語根が共通しているから、これらの語は同源だというわけです。

でも k-/ku- が語根ですが、中国語ではそれが失われました。このことは、広東語で shí を sih-k とすることから確認できます。ちなみに、sih- の原義は「歯」で、-k の原義は「牙」です。

では、fù/bə- が語の中核部分で、その原義は「男」です。朝鮮語の a- の祖形は ga-「私の」で、-ji は「人」というのが原義です。日本語では、中国語-ch<sup>h</sup>i-n(日本語の「ちゃん(くさま)」と同源)の-ch<sup>h</sup>i、朝鮮語の -ji に相当する接尾辞だけが残っています。専門用語を使うと、t(-to)と shi(-shi)は ti(-ti)のそれぞれ母音交替形と子音交替形です。

では、mǔ/mu-/mə-/mma/-mo が「女」を意味する語根です。ə-/a- の祖形は「私の」を意味する ga- です。fa-faの faも ka-kaの ka- も、ga- に溯ります。要するに、fa-fa と ka-ka は接頭辞だけが残った形なのです。

このように語の成り立ちを考慮しながら比較を行う

と、実に多数の言語の多数の語が同じ源から発したものであることが明らかになります。驚くべきことに、系統不詳と言われるあのシュメール語でさえ日本語や朝鮮語の親類であることが判明します。ちなみに、上記 ~ に対応するシュメール語は、ku-r「括る」、kú「食う」、a-b「父」、a-ma「母」です。

どうやらアジア太平洋諸語は、一つの巨大な系統樹を構成する言語群のようです。

### プロフィール

こんどう けんじ

国際言語文化研究科教授、  
学術博士。1943年、愛知県生まれ。1971年、名古屋大学大学院文学研究科博士課程退学。同年、九州大学教養部講師。同助教授を経て、1971年、名古屋大学総合言語センター助教授。1988年、同教授。1991年、名古屋大学言語文化部教授。2003年より現職。専門は歴史的な言語類型学。「世界の言語」に関心があります。なおこの記事は、本年6月に刊行される予定の『言語類型の起源と系譜』(松柏社)の一端を紹介したものです。





# 超構造らせん高分子

八島 栄次

私たちの研究室では、「らせん」と「キラリティー」をキーワードにした研究を有機合成、特に高分子合成を中心に展開しています。2003年2月からは、高等研究院の流動教員として「超構造らせん高分子」と題したプロジェクトを遂行しています。ほぼ同時期に始まった科学技術振興機構・戦略的創造研究推進事業 (ERATO) の支援を受けたものです。ここでは、超分子化学や高分子合成・物性、液晶、原子間力顕微鏡、分子生物学といった専門が異なる博士研究員さんらが中心となって、守山区の志段味に位置するサイエンスパークで切り口の異なる研究をしています。

研究の目的をひと言でいうと「核酸やタンパク質などの生体高分子が有するらせん構造が生命の機能、すなわち、分子認識能、触媒作用および情報機能を発現し得る要因の一つとして捉え、望みの向きに制御した人工らせん高分子を基本骨格として、任意の化合物群をらせん状に配列・制御することによりこれらの機能を示すらせん構造の超分子を創製し、超構造らせんに由来する特異な分子認識能、触媒作用、情報機能を発現する超構造らせん高分子を構築すること」です。

生命の物質とも言える DNA が D 体の糖から出来た高分子であり、その二重らせんは右巻きであって左巻きでないことは、実に不思議なことですが、一般には意外に認知されていない(関心がない?) 気がします。でも、らせんには右巻きと左巻きがあって、それらは実はまったく「別のモノ」なのです。

10年ほど前に、右巻きあるいは左巻きのらせん高分子を自由自在に作り出す方法を見い出して以来、らせんの持つ魅力と不思議な性質・機能に魅せられ、今日まで研究を続けています。この間、「記憶力」を有するらせん高分子やらせん反転する高分子、右巻きと左

巻きで違う色に変化するらせん高分子などを合成してきました。フラレンや様々な機能性分子群をらせんに沿って一方向に並べた複合体の構築も可能です(図1)。このようならせん状超分子ナノ複合体には、らせんに由来する新規な機能と応用が期待できます。

らせんが集まると思わぬ機能を発揮することもあります。生体内ではらせん(ヘリックス)構造を有するタンパク質が束になって特異なヘリックスバンドル構造を形成しています。最近、ある高分子(ポリフェニルアセチレン誘導体)が、少量の光学活性化合物の添加によって一方向巻きのらせんを形成し、濃厚水溶液中でコレステリックな液晶相を発現することを見い出しました(図2)。水中で液晶性を示す人工らせん高

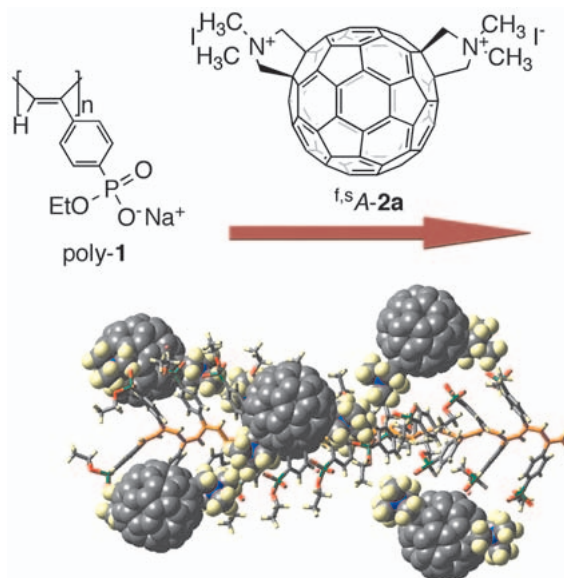


図1. フラレンがらせん状に配列した複合体。光学活性なフラレンを用いることにより、ポリマー (poly-1) に一方向巻きのらせん構造が誘起されるとともにフラレンがらせん状に配列制御する。



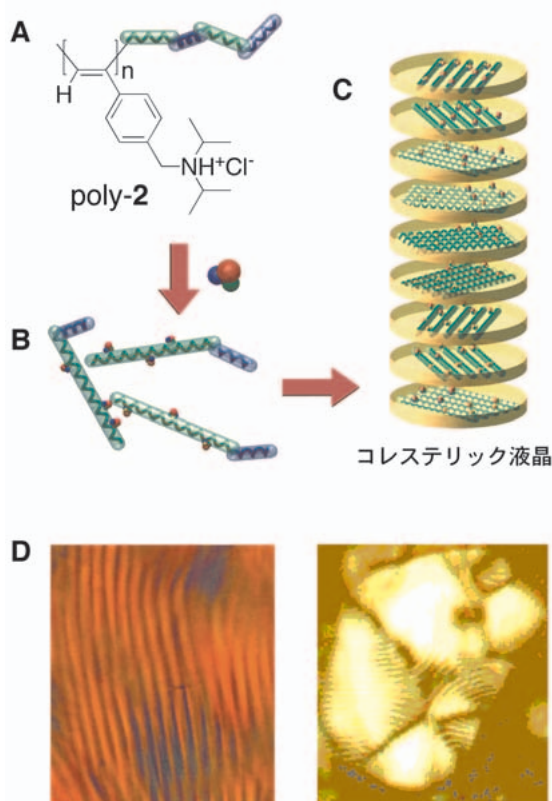


図2. ポリマー (A: poly-2) に極く少量の光学活性体を添加することによりらせん構造に左右の片寄りが生じたポリマーが生成する (B)。濃厚水溶液中ではらせんは完全に一方向巻きへと不斉増幅され、コレステリック液晶相を形成する (C)。人工らせん高分子からなるコレステリック液晶の写真 (D)。

分子の初めての例です。らせんが自己組織化した液晶場では希薄溶液中より遥かに優れた不斉増幅現象を示します。X線構造回折の結果より、らせん構造の全容が明らかになりつつあります。らせん高分子の自己組織化を利用すると、一方のらせん情報を他の高分子に転写し、らせん構造を複製することも可能です。原理的には、1本のらせん高分子があれば、それをテンプレートに用いて転写・複製を繰り返すことによって無限の数のらせん高分子を作り出すことも近い将来できるようになるでしょう。

生体の仕組みに学び、その高度の機能を取り入れることによって新たな材料を創成することも興味ある研究課題です。遺伝子の相同組換え時に重要な役割を担

う RecA と呼ばれるタンパク質は、DNA と特異的に結合し、超構造らせんフィラメントを形成します。遺伝子操作を施した RecA を用いると任意の場所にギャップや T 字配線が可能な金や銀のナノワイヤーを作ることも出来ます。

分子を思うがままに作り、操ることができる点に化学の醍醐味があると思います。化学、生物、構造物性を専門とする学生、博士研究員の方々との分野横断的な本共同研究を通して、生命機能を発現するシステムの本質の理解を深めるとともに、自己複製や増幅、転写といった、生体系だけが有すると信じられている機能の発現、らせん構造を基盤とする材料開発を目指したいと考えています。

## プロフィール

やしま えいじ

1958年生まれ。1986年大阪大学大学院基礎工学研究科博士課程中退。同年鹿児島大学工学部助手、1991年名古屋大学工学部助手、講師、助教授を経て、1998年より名古屋大学大学院工学研究科物質制御工学専攻教授。2003年2月より、

高等研究院流動教員を兼任。この間、1998年10月から3年間、科学技術振興事業団さきがけ研究21「形とはたらし」研究員を兼業。2002年11月から科学技術振興機構・戦略的創造研究推進事業 (ERATO)「八島超構造らせん高分子プロジェクト」研究総括を兼業。専門は高分子化学、生体機能関連化学。2000年 Wiley 高分子科学賞 (高分子学会)、2002年日本 IBM 科学賞受賞。

連絡先: yashima@apchem.nagoya-u.ac.jp

研究室 HP: <http://helix.mol.nagoya-u.ac.jp/>





## 名古屋大学体育会会長表彰式を挙行

名古屋大学体育会は、12月6日(月) 豊田講堂第1会議室において、名古屋大学体育会会長表彰式を挙行しました。

この表彰は、名古屋大学体育会における優秀な個人・団体及びその指導者の栄誉を讃え、その功績を広く顕彰することを目的としたもので、今年で16回を数えました。

今年は、11月22日(月)の体育会会長表彰審査会の審査を経た「個人の部」19名、「団体の部」6団体が、本学体育会会長である平野総長から表彰され、1年間のめざましい成績を讃えられました。

なお、受賞者及び受賞団体には副賞として、名古屋大学校友会から記念品等が贈呈されました。



記念撮影



個人の部で表彰された漕艇部の奥村さん



団体の部で表彰された陸上競技部代表の河合さん

個人の部		団体の部
運動部名	氏名(学部・学年)	運動部名
漕艇部	中井麻衣子(工・4)	航空部
"	奥村 麻友(経済・3)	ライフル射撃部
"	早川 雪絵(工・4)	弓道部
"	伊藤麻耶香(教育・2)	少林寺拳法部
"	美濃部由佳(農・4)	舞踏研究会
"	北川 哲(工・4)	陸上競技部
"	佐々木啓二(工・4)	
オリエンテーリング部	三宅 文彦(理・4)	
航空部	西島 宏幸(工・2)	
ライフル射撃部	脇 伸行(経済・4)	
"	藤原早絵子(理・2)	
少林寺拳法部	赤崎 里史(農・4)	
"	神谷 雄介(工・4)	
"	新藤 絢子(工・4)	
"	中根 愛(教育・3)	
舞踏研究会	中河 智博(工・4)	
"	増元 祐介(工・4)	
相撲部	江原康太郎(医・4)	
"	鈴木 博之(工・2)	



## 舞踏研究会の中河・池中ペアが モダン部門の「クイック・ステップ」で優勝

- 第49回全日本学生競技ダンス選手権大会に8種目出場 -

第49回全日本学生競技ダンス選手権大会が、12月12日(日)、獨協大学35周年記念アリーナで、全国から58大学が参加して行われました。本学舞踏研究会は、団体では34位に終わりましたが、モダン部門の「クイック・ステップ」\*では、本学舞踏研究会の中河智博(工学部4年)・池中理恵(金城学院大学4年)組が優勝しました。

舞踏研究会は、中部地区・西日本地区大会での好調さを全国大会で発揮すべく、8種目(ワルツ、タンゴ、フォックス、クイック、チャチャ、

ルンバ、サンバ、パソ)にフルエントリーし上位進出を目指しましたが、団体の成績は34位となりました。

また、中河・池中ペアは、今年度の中部モダン戦で優勝、西日本モダン戦で準優勝するほどの実力を持ったペアで、本大会のモダン部門のクイック・ステップ(51組が出場)でもその実力を発揮し、1次予選・2次予選・準決勝と勝ち上がり、決勝戦(6組が出場)でも素晴らしい演技を行い優勝しました。

\* Quick Step (クイック・ステップ):  
テンポの速い曲に乗せた軽快な踊り。



モダン部門のクイック・ステップで優勝した中河・池中ペア

INFORMATION

## 名大史をつむぐ資料を大学文書資料室に！

大学文書資料室に名大史をつむぐ資料をご寄贈ください。その他、ご処分予定の資料についても、まずは同室にご一報ください。

教育・研究に関する資料・刊行物  
大学行政に関する資料（会議メモ・書類など）  
広く社会活動に関する資料  
（スクラップ記事・パンフレット類など）  
ご退職関係の記念冊子・記念論集・業績集などの資料  
など



大学文書資料室



22 = 北部厚生会館 25 = 理系食堂  
40 = 環境学研究科 11 = 農学部

ご寄贈資料につきましては、名古屋大学大学文書資料室規程および同利用規程にもとづいて保存・管理し、本学の足跡を示す資料として、本学および学術研究の発展のために永く活用させていただきます。

**【連絡先】 名古屋大学大学文書資料室**  
〒464 - 8601 名古屋市千種区不老町  
電話 & Fax : (052) 789 - 2046  
mail : nua\_office@cc.nagoya-u.ac.jp



# イベントカレンダー

開催月日

イ ベ ント ・ 概 要

## 9 .11～ 3 .5 オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」



目 的：高校生に、出来るだけわかりやすく、大学の研究室で行われている最新の研究やその熱意を伝えること  
 場 所：文系総合館カンファレンスホール  
 時 間：10時～12時  
 対 象：高校生、社会人  
 回 数：10回（いずれも土曜日）  
<http://www-oc.soec.nagoya-u.ac.jp/>  
 連 絡 先：大学院経済学研究所エクステンション・サービス 052 - 788 - 6197

## 1 .19～ 2 .18 第5回名古屋大学博物館企画展



テ ー マ：家族の肖像 分岐する世界と統合する意識 アーティスト小川信治と11人の名大生によるコラボレーション  
 場 所：博物館  
 開館時間：10時～16時  
 休 館 日：月・火曜日 ただし祝休日は開館  
 入 場 料：無料  
 連 絡 先：博物館事務室 052 - 789 - 5767

## 2 .4 高等教育研究センター第47回招聘セミナー

場 所：文系総合館7階オープンホール  
 時 間：13時30分～  
 講 師：馬越 徹桜美林大学大学院教授  
 演 題：大学職員のキャリアアップのための大学院教育  
 連 絡 先：近田政博高等教育研究センター助教授 052 - 789 - 5692

## 2 .22 第8回高等研究院セミナー

場 所：高等総合研究館カンファレンスホール  
 時 間：17時～  
 講演者：岡田 猛教育発達科学研究科教授（高等研究院流動教員）「芸術創作プロセスの理解に向けて」（仮題）  
 講演者：関 一彦物質科学国際研究センター教授（高等研究院流動教員）「有機分子で電気や光をあやつる」（仮題）  
 連 絡 先：研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛 052 - 788 - 6051

開催月日

イ ベ ン ト ・ 概 要

3 . 3 高等教育研究センター第27回客員セミナー

場 所：文系総合館7階オープンホール  
 時 間：14時～  
 講 師：中津井泉リクルート(株)カレッジマネジメント編集長(高等教育研究センター客員教授)  
 演 題：名古屋大学のブランド力  
 連 絡 先：近田政博高等教育研究センター助教授 052 - 789 - 5692

3 . 3 ~ 3 . 4 大学院国際言語文化研究科・国際シンポジウム

テ ー マ：境界と文化創造 - 東アジアの中の古代、中世の日本(人、神、仏) -  
 場 所：文系総合館カンファレンスホール  
 連 絡 先：伊藤信博国際言語文化研究科助手 052 - 789 - 5282

3 . 12 留学生センター地域貢献事業「小中学校教員・日本語ボランティア現職者研修会」



場 所：あいち国際プラザ  
 時 間：13時20分～16時30分  
 講 演 者：田中 薫(大阪市立豊崎中学校教諭)  
 連 絡 先：浮葉正親留学生センター助教授 052 - 789 - 5771

3 . 23 ~ 7 . 31 第8回名古屋大学博物館特別展

テ ー マ：時を測る - 地球誕生から中世まで -  
 場 所：博物館  
 開館時間：10時～16時  
 休 館 日：月・火曜日 ただし祝休日は開館  
 入 場 料：無料  
 連 絡 先：博物館事務室 052 - 789 - 5767

## 本学関係の新聞記事掲載一覧（16年12月分）

	記事	月日	新聞等名
1	治安悪化警報：犯罪被害者支援団体「被害者サポートセンターあいち」の顧問・蔭山英順・教育発達科学研究科教授は「被害者側の視点に立って制度を整備することが何より重要」と指摘	12.1(水)	日経(朝刊)
2	本学敷地内鏡ヶ池で教育学部附属高校教諭・仲田恵子さんがくちばしに輪っか状のものが挟まったアヒルを発見、獣医師らと救出	12.1(水)	中日(朝刊) 読売
3	丸文、堀勝工学研究科教授の開発したラジカル密度の計測法を実用化し、本学発ベンチャー企業 NU エコ・エンジニアリングと連携してラジカルソースの販売を始める	12.2(木)	日刊工業
4	ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「21世紀の創造」の科学フォーラム名古屋開催 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授ら4氏が基調講演行う	12.2(木)	読売
5	新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)は2004年度の第2回「産業技術研究助成事業」の助成対象に西澤典彦・工学研究科助手らの研究他50件決定	12.2(木)	日刊工業
6	生田幸士・工学研究科教授らが内視鏡と組み合わせて使う小型医療ロボット開発	12.3(金)	日経(朝刊)
7	東南海・三河地震から60年 関係者に課題聞く：福和伸夫・環境学研究科教授は「耐震化急げ」	12.3(金)	朝日(朝刊)
8	アレルギーの子を持つ母4人が坂本龍雄・医学部附属病院小児科講師の監修のもと「お母さんが考えたアレルギーに優しい住まい方」執筆	12.3(金)	朝日(朝刊)
9	私と万博：鮎京正訓・法政国際教育協力研究センター教授 ウズベキスタンよろしく	12.5(日)	読売
10	公開講座友の会国際交流委員会による留学生向け「注連縄づくり教室」開催	12.5(日)	中日(朝刊)
11	法学部・大学院法学研究科は法科大学院設立を記念し、市民向けの無料連続公開講座を開催	12.5(日) 12.7(火)	毎日(朝刊) 中日(朝刊)
12	この人に聞きたい：井口昭久・医学系研究科教授 一貫して人の面が見たい	12.6(月)	毎日(朝刊)
13	時のおもり：池内了・理学研究科教授 被災に備えた公共投資を	12.6(月)	中日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
14	本学などで開催の「日本ジュニア数学コンクール」と「論文賞」の入賞者5人の横顔紹介	12.6(月)	中日(朝刊)
15	名大サロンの主役：吉田茂生・環境学研究科助教授 温暖化の先は寒冷化	12.7(火)	中日(朝刊)
16	目の凝りをしらべてみる：宮尾克・情報連携基盤センター教授「ドクター・レックス」に毛様体筋の緊張ほぐす効果	12.7(火)	朝日(朝刊)
17	僕たちは怠け者じゃない ニートという存在：逃避 太田聡一・経済学研究科教授「単なる“怠け者”では片付けられない深刻な社会問題」と指摘	12.7(火)	中日(朝刊)
18	本学防災アカデミー 8日開催	12.7(火)	朝日(朝刊)
19	浅井滋生・工学研究科教授らはセラミックス結晶を特定の方向に配列できる手法開発	12.8(水)	日刊工業
20	うつ病とはどんな病気ですか 尾崎紀夫・医学系研究科教授に聞く	12.8(水)	朝日(朝刊)
21	丹羽公雄・理学研究科教授ら 新開発のフィルムで素粒子「タウニュートリノ」の飛跡を捕らえる実験開始	12.8(水)	毎日(朝刊)
22	根室半島沖で6日深夜に起きた地震 安藤雅孝・環境学研究科教授は「双子の地震とも考えられる」と話す	12.8(水)	朝日(朝刊)
23	「伊勢湾・三河湾を考える会」第9回シンポジウム 愛知芸術文化センター総長・加藤延夫・本学名誉教授がコーディネーターとして参加	12.8(水)	中日(朝刊)
24	読売新聞社は「読売新聞特別講座」を本学に開設 アジア諸国からの大学院留学生に英語での講義を行う 平野総長は「アジア諸国の実情を多面的に学習し、深めることを期待」とコメント	12.8(水)	読売
25	本棚：「山と森への渡り鳥」北川勝弘・農学国際教育協力研究センター教授著	12.8(水)	朝日(夕刊)
26	井口昭久・医学系研究科教授がエッセー集「ちょっとしみじみ 悩みつきない医者人生」出版	12.8(水)	朝日(朝刊)
27	老年学：井口昭久・医学系研究科教授 ストレス反応も複雑に	12.9(木)	朝日(朝刊)
28	「県立3大学1法人化」愛知県立大学学長・佐々木雄太・本学名誉教授に聞く	12.9(木)	朝日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
29	各国の教育関係者や学生による国際シンポジウム「授業研究を基礎とした校内研修」開催 場正美・教育発達科学研究科教授は「校内研修は教師の自己研修の場」と説明	12.10(金)	中日(朝刊)
30	うつの本音:「見えぬ病」医師も迷い 尾崎紀夫・医学系研究科教授は遺伝子の研究からうつ病の治療を目指す	12.10(金)	中日(朝刊)
31	北村友人・国際開発研究科助教授「現場と政策の両面で得た経験を生かし、研究成果を送り出したい」	12.10(金)	朝日(夕刊)
32	本学博物館と東京文化財研究所はアフガニスタン・パーミヤン遺跡の仏教壁画を放射性炭素年代測定法で調査 宮治昭・文学研究科教授は「インドやペルシャの影響がどの時代に入ってきたかなど分かる可能性が出てきた」と話す	12.11(土)	中日(朝刊) 他2社
33	日本モンキーセンターでサルと人間とを比較して現代人の運動能力考える研究会18、19日開催 二日目に福田敏男・工学研究科教授がロボットの運動制御について発表	12.11(土)	読売
34	在宅療養講演会1月15日に開催 井口昭久・医学系研究科教授が「高齢社会あれこれ!」と題して話す	12.11(土)	朝日(朝刊)
35	東海地方11月の地震:林能成・災害対策室助手	12.11(土)	読売
36	大幸医療センターで「メトロニダゾール」を使用し胃がんの原因ピロリ菌を再除菌する自由診療開始	12.12(日)	読売
37	理学懇話会・緊急企画「東海地震は本当に来るのか」16日開催 安藤雅孝・環境学研究科教授による新潟県中越地震の報告など	12.14(火) 12.15(水)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
38	本学COE第19回オープン・レクチャー 稲葉伸道・文学研究科教授15日講演	12.14(火)	中日(朝刊)
39	学生街ダンス:藤井亜矢子さん・本学4年生 卒業論文報告会 聴衆50人に緊張	12.14(火)	中日(朝刊)
40	南天に挑む:水野範和・理学研究科助手 未知への夢人動かす	12.15(水)	中日(朝刊)
41	学習到達度調査、国際数学・理科教育調査の2つの国際調査で日本の子どもの学力低下傾向示す 日本学術会議数学教育小委員会委員長・浪川幸彦・多元数理科学研究科教授「中学校での基礎的な科目の授業時間を復活させることが必要」とコメント	12.15(水)	毎日(朝刊)
42	科学研究オープンシンポジウム「今あらためて『環境』を考える」野依記念学術交流館で17日開催	12.15(水) 12.16(木) 12.21(火)	読売 中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
43	東海地区大学写真部合同展開催 同展実行委員会代表の内藤淳平さん・本学3年生は「写真に映し出される各校の違いを楽しんでください」と話す	12.15(水)	中日(朝刊)
44	中部WAY:日本ガイシ会長・柴田昌治・全学同窓会副会長 前向きに、内なる国際化	12.15(水)	日経(朝刊)
45	理念と現実と 中部の法科大学院上:「合格率3割」の衝撃 本間靖規・法学研究科教授は「3割の合格率では、社会人が会社を辞めてまで入学しなくなる」と懸念	12.15(水)	日経(夕刊)
46	名古屋言語研究会例会が本学で18日開催	12.15(水)	朝日(夕刊)
47	理念と現実と 中部の法科大学院下:学生確保へ知恵絞る 本学はトヨタ自動車とのパイプを強調、法務部門へのエクスターンシップを売りに	12.16(木)	日経(夕刊)
48	浸水地域、予測図に漏れ:辻本哲郎・工学研究科教授「自治体の予測図問題多く不親切」とコメント	12.17(金)	朝日(夕刊)
49	ニッポン見聞録:韓秀蘭さん・本学大学院生 女子短大生の勇気	12.17(金)	朝日(夕刊)
50	「名張毒ぶどう酒事件」の奥西勝死刑囚の第七次再審請求審で石川孝司・工学研究科教授の証人尋問	12.18(土)	中日(朝刊)
51	訃報:奥田孝美・本学名誉教授	12.18(土)	中日(夕刊) 他2件
52	年代測定総合研究センターで「古代人のテクノロジー体験活動2004」開催 小中学生が体験学習	12.19(日)	中日(朝刊)
53	輝いて万博人:日本国際博覧会協会会長・豊田章一郎・全学同窓会会長 より良い世界の未来図に	12.19(日)	日経(朝刊)
54	大学文書資料室が豊田講堂の歴史をたどるブックレット「豊田講堂 - Toyoda Auditorium」発刊	12.20(月)	中日(朝刊)
55	2004年度の文化功労者顕彰を受けた名城大学教授・赤崎勇・本学名誉教授の記念祝賀会開催	12.20(月)	読売 中日(朝刊)
56	本学他南山大、名城大、岐阜女子大の学生44人で構成される「薬害肝炎訴訟を支える会・名古屋」が名鉄新名古屋駅前でC型肝炎検査の受診を呼びかけ	12.20(月)	毎日(朝刊)
57	名大サロンの主役:加藤靖恵・文学研究科助教授「失われた時を求めて」の草稿を読み解く	12.21(火)	中日(朝刊)
58	東大グループがGPSで地震観測に成功:平原和朗・環境学研究科教授「解析の有力な方法」とコメント	12.21(火)	中日(朝刊)
59	笠瀬中学校で本学などで学ぶ6ヶ国6人の留学生を招いた国際交流会「食文化を語り合う」開催	12.21(火)	中日(朝刊)



	記 事	月 日	新聞等名
60	愛知県産業活性化計画策定委員会(委員長・山田基成・経済学研究科助教授)は愛知県の次世代産業の育成方針を示した「産業創造計画案」を長谷川信義副知事に提出	12 22(水)	日経(朝刊) 他2社
61	天文学講演会「生まれ変わる『なんてん』サブミリ波の開拓始まる」23日開催 福井康雄・理学研究科教授が「NANTEN2」の観測結果を分かりやすく解説	12 22(木) 12 24(金)	毎日(朝刊) 中日(朝刊)
62	特別天然記念物「尾長鶏」のはく製が三重県玉城町の愛鶏家西川祥一さんから本学博物館に寄贈される	12 24(金)	毎日(朝刊)
63	生田幸士・工学研究科教授ら 全長約10マイクロメートルのアゲハチョウの作成に成功	12 24(金)	日経(朝刊)
64	愛知県医師会健康教育講座 3月9日に「治る難聴治らない難聴」曾根三千彦・医学系研究科助教授の講演開催	12 24(金)	朝日(朝刊)
65	東京テクノ・フォーラム21のシンポジウム「昆虫たちは人類を救うか-がん、心筋梗塞、感染症...急展開する虫の医薬応用研究」開催 中部大学副学長・山下興亜・本学名誉教授が「昆虫世界への誘惑」をテーマに基調講演	12 24(金)	読売

	記 事	月 日	新聞等名
66	愛・地球博会場に展示される冷凍マンモスのデオキシリボ核酸(DNA)の解読に小澤智生・環境学研究科教授ら年明けから着手	12 25(土)	読売
67	挑む:安成哲三・地球水循環研究センター「丸ごと見る」視点を	12 25(土)	毎日(朝刊)
68	地球水循環研究センター協議会は中村健治センター長の後任に上田博教授を選出、太陽地球環境研究所教授会は上出洋介研究所長の後任に藤井良一教授を選出、発達心理精神科学教育研究センター協議会は本城秀次センター長の再任を決定	12 28(土)	中日(朝刊)
69	「理数系学会教育問題連絡会」(世話人・浪川幸彦・多元数理科学研究科教授)は理数科目の授業時間を増やすことなどを盛り込んだ改革案を中央教育審議会に提出	12 28(土)	中日(朝刊) 毎日(朝刊)
70	With:きゃんぱす 本学舞蹈研究会 優雅な舞、体力が勝負	12 28(土)	朝日(夕刊)
71	伸びる名大ベンチャー 本学は2003年度のベンチャー企業設立数が4社で単年度設立数では全国3位	12 29(日)	朝日(朝刊)

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ  
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>)でもご覧いただけます。



本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは総務広報課にお寄せください。

総務企画部総務広報課広報掛

電話：052(789)2016

FAX：052(789)2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

### ③坂田昌一（さかた・しょういち） 研究の民主化と平和利用をもとめて

坂田昌一名誉教授（1911～1970）は、名古屋帝国大学に理学部が発足した1942（昭和17）年から1970年に病死するまで、物理学科（通称物理学教室）の教授として在職しました。ニュートリノなどの素粒子の構造を、いわゆる「坂田模型」や「新名古屋模型」として発表するなど、現在の素粒子物理学の基礎をきずいた世界的に著名な理論物理学者です。『広辞苑』にも、「坂田」の項目にその名前が取り上げられています。

その一方で坂田は、科学が戦争やファシズムに利用された時代を反省し、社会に対する科学者の責任を重視する立場から、研究環境の民主化や研究成果の平和利用を提唱する幅広い活動をした人物としても知られ、多くの著作も残っています（『科学と平和の創造』1963、『科学者と社会』1972など）。

坂田は敗戦直後の1946年、「名古屋大学物理学研究室憲章」制定の中心となりました。そこでは、冒頭に「物理学教室の運営は民主主義の原則に基く。」とうたい、教室が学生をふくめた構成員全員の参加のもと、民主的に運営されることを定めています。同教室では、現在でも憲章の理念にもとづいた規則によって運営がなされています。

また坂田は、京都帝国大学出身の先輩でいずれもノーベル物理学賞をうけた湯川秀樹、朝永振一郎らとともに、科学の戦争利用に反対する運動にも積極的に取り組みました。原子核研究を専門とする立場から、とりわけ核兵器の拡大を憂慮し、科学者による核軍縮運動に情熱をかたむけました。人類がこれまでの「戦争の論理」から、「平和の論理」によって動くようになること、それが坂田の願いだったのです。

本学の自由闊達な学風と、「名古屋大学平和憲章」（1987年制定）における平和主義の精神は、こうした坂田の科学思想の流れをくむものといえるでしょう。

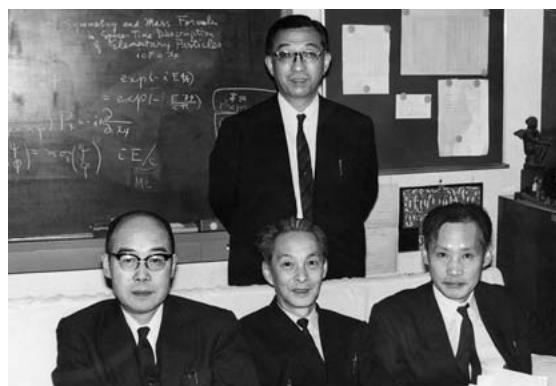
なお、坂田の死後、物理学教室に坂田記念史料室が開設され、多くの関係資料を収集、整理、保存しています。



坂田昌一名誉教授



憲章制定の中心になった坂田（左から2番目）、有山兼孝（同3番目）、上田良二（右から2番目）、関戸弥太郎（右端）の各教授（1946年）



湯川秀樹（左）、朝永振一郎（中央）両博士と坂田教授（後ろ）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、

大学文書資料室（052-789-2046、[nua\\_office@cc.nagoya-u.ac.jp](mailto:nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)）へご連絡下さい。